

力が充分発揮できるポストの獲得ができるような方法を探り、改善を推進してほしいものである。

雑犬も東大に27年間住みついてしまった。しか

し雑犬の習性は最後まで変わらず、このため育ちのよい東大人士には違和感を与えたこともあったかと思うが、御容赦願いたい。

井上康男先生のこと

北 島 健 (生物化学専攻)

井上先生は、26年間、東京大学理学部（大学院理学系研究科）において、研究と教育に携わって来られました。私達教え子一人一人が先生にご指導頂いた期間はこの長い歳月に比べますと、ごく僅かな時間ではありましたが、先生のきめ細やかな研究の進め方、サイエンスに対する考え方を目の当たりにすることができ得難い充実した研究生生活を送ることができたことを実感しております。

先生は、名古屋大学理学部化学科の有機化学教室で平田義正先生の下で学修、研鑽されました。また、当時、物理化学教室におられた久保正二先生に感化されたとお聞きしており、このころに井上先生の鋭い化学に対する感覚が磨かれたものと窺われます。1960年修士課程を修了されると、名古屋大学の博士課程進学を選ばず、オーストラリア国立大学の博士課程に進まれました。Douglas D. Perrin 教授の下で、ペテリジンの可逆的水和の迅速反応の反応機構の研究をされ Ph. D.の学位を取得されました。1963年、帰国後、中西香爾先生（現、米国コロンビア大学教授）に望まれて東北大学理学部化学科の助手に就任され、オリゴヌクレオチドの化学の研究を中心に仕事を始められました。1969年に、東京大学理学部生物化学教室に赴任されて以来、研究において活躍されるとともに、教育に従事されました。東京大学では、核酸の化学に加えて以前から興味をもっておられた糖質の生化学の研究もはじめられ、数多くの業績をあげられました。「その時にその分野で最もよいジャーナルに論文を出す」という先生の主義

どおりに、世界から評価される数々の論文を発表して来られました。また、講義においては、多くの学生が生体物質を単なる記号としてしか眺められないことの愚かさを知らされ、化学物質として眺める楽しさ、大切さを学ぶことができたことは、将来生物化学の分野を支えて行くであろう我々若い世代の研究者にとって得難い財産となっています。

井上先生が、超一流の研究者であることは国の内外で先生を知るものなら誰しも認めるところがありますが、その秘密は何であろうかと考えてみますと次のような点が挙げられるように思います。ご性格については、フェアであること、妥協を許さないこと。また、研究遂行においては、判断・決断・行動が速いこと、半端な仕事に対する評価が厳しいことです。先生が研究について語られる時、まず「研究は楽しくなければならぬ」と言われます。「研究はお金をくれなくても楽しい。まして研究者は楽しい研究をやって、お金をもらえるのだからこんな贅沢はない」とも。研究の楽しみは、「何か新しいことを発見すること」、「ひとつの発見からそれを体系化して行くこと」であり、「自発的であって強制・制限されるものではない」自由にあると言われてこられた。また、「研究は国際的でなければならぬ」。事実、国内だけでなく、国際的に通用する仕事を心掛けられて来られた。また、「一流の研究者と共同研究を行いなさい」とも。日本の内外を問わず、共同研究を進めるには、一流の研究者を選べ

と言われるが、“言うはやすく行は難し”。確かに我々の研究グループは井上先生ならではの有意義な共同研究を展開してくることができ、我々にとっては実に楽しい研究をさせて頂きましたが、これは先生だからこそできたことでありましょう。更に、先生は、「他人の研究の足を引っ張るようなことをするな」と日頃から科学の進歩を妨げるものとして、研究者が自分の利益のみを考える風潮を厳しく批判しておられる。また、そのような研究者に対して、「真に研究するものを、何人も妨げる権利は無いはず」で、そのような所為は「研究者の片隅にもおけない」ことであると警告されている。

井上先生が人と付き合う上で日頃から感心させられますのは、学生といえども個人の考えを尊重していただき、自分と異なる考えに対して、決して独裁者的に命令・強要されない点であります。また、忙しいからといって、学生からの質問、議論をおろそかにすることも一度たりともありません。研究はひとりの力で行われたものではないからと言われ、国内だけでなく国際的にも学生・若手研究者を前面に押し立てて評価していただきま

す。おそらくこれらの点については、どんな偉い先生にも真似のできないことでは無いでしょうか。

また、“忙中に閑あり”とあって、忙しさの合間にいろいろなレジャーを行ってきたことが思い返されます。研究室でテニスをする機会が何回もありましたし、毎夏、国際学会などの日程を摺って、3～4日間先生の軽井沢の別荘に招待頂いて、寝食を共にして勉強会を行ったり、レジャーに興じたり楽しく過ごさせて頂きました。冬には、毎年恒例のスキー合宿を行い、研究室内のメンバー間の親睦を深めることができました。思うに、井上先生は学生に最も身近な先生でありました。研究・教育面では大変厳しい先生でしたが、そのような厳しさも、また楽しさも学生の身近に居られればこそであったのだと今更ながらに感じられます。このような先生と付き合わせて頂き、感謝の念に絶えません。最後になりましたが、東京大学を離れられても、我々をご指導頂きますようお願い申し上げますと共に、井上康男先生のこれからの一層の活躍を祈念致したいと思いません。

